

特集

戦前期における大学史・高等教育史の再検証

— 東アジアという視点から —

企画の趣旨

従来の教育史研究では、内地、外地という区分に見られるように現在の日本の国境線を暗黙の前提としているものが少なくない。このため朝鮮、台湾といった外地から内地への「留学生」のみが強調される結果となっている。しかし近年になって「帝国日本」という分析枠組みが提示され、台湾、朝鮮、南洋諸島、満州、あるいはハワイやブラジルと言った移民先なども含めた領域内での人材や知識、あるいは資本や物資の交流が見直されつつある。

こうした点を踏まえるのであれば、外地↓内地といった「留学」だけではなく、内地↓外地の「留学」や外地↓内地といった「留学」にも目を向ける必要がある。また、親世代の移住も視野に入れるのであれば、内地↓外地↓内地（外地に寄留する日本人子弟の内地進学）や外地↓内地↓外地（日本に寄留する移民の子弟の外地進学）といった多様な人の動きも視野に入れる必要が考えられる。

そこで本特集では、これまでの旧制中学研究や旧制高校研究に見られるような学校史の枠組みを超え、あらたに「学歴／学校歴」から照射される「帝国日本」の「知」の制度的運用をめぐる悉皆的研究を行う手がかりや視点を考えてみたい。

企画の経緯

本特集は、令和二年九月一四日に行われた第三回広島大学文書館研究集会の記録である。当初は三月に対面式で開催する予定であったが、新型コロナウイルスの拡大にともない、急遽延期を余儀なくされた。

その後、オンライン会議の環境が整ったことを受け、マイクロソフト社の Teams を使用して開催することができた。このように変則的な状況にもかかわらず、報告やコメントを引き受けてくださった永島広紀先生、木村健二先生、福嶋寛之先生、山田浩之先生、山口輝臣先生の諸先生方に改めてお礼を申し上げたい。

また、忙しい中、時間を作って本研究会にご参加いただいた二四名の方々にも深く感謝する次第である。限られた時間のなかで十分に議論が尽くされたとは言い難いが、本研究会の成果をもとに、新たな研究が展開する一助となれば幸いである。

(石田 雅春)